

中国・四国 発想で勝負

次世代の芽、新機軸で育成。次世代を担う新技術や発想が中国と四国で相次いで生まれている。自動車開発では省エネ・次世代技術を活用した商品開発が加速しているほか、様々な原料を活用した再生可能エネルギーの取り組みも進む。観光では、これまで旅行会社などに頼りがちだった自治体が、一風変わった「アイデア」勝負の企画で売り込む動きが活発になっている。

豊かな自然に恵まれ、地域の特長を生かした特産品の多い中国四国地方では、資源を加工するときに出る副産物や廃棄物をバイオ燃料に加工する取り組みが広がっている。

香川県や高松市などは6月、うどんの製麺所やうどん店頭で出た廃棄うどんか

らバイオエタノールを生成し、うどんをゆでる燃料として再利用する「うどん循環プロジェクト」を本格的に開始した。

香川県の統計によると、県内のうどん店は人口10万人当たり約60店舗で、全国平均の2・3倍。コシの強さを求める讃岐うどんでは、ゆでてから30〜40分ほどたった麺を捨てるという店も多く、廃棄費用が負担となっていた。

そこで県や市、地元の非営利組織（NPO）が協力して「うどん循環プロジェクト」を開始。製麺所で出るうどんの切れ端や、うどん店でゆでてから時間がた

ってしまった麺を集め、水と酵母菌を加えて専用のプラントで発酵させる。それを製麺所や店に戻し、うどんをゆでるための燃料として再利用する。

7月上旬には新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）のプロジェクトに採択され、来年度から数十万円の助成金を受けられることが決まった。

愛媛県ではみかんをジュースに加工するときに出る残さをエタノールに加工する取り組みが進んでいる。県と「ポンジュース」で有

名なえひめ飲料（松山市）、愛媛大学が協力し、みかんジュースとして使われた柑橘（かんきつ）の残さからバイオエタノールを製造する技術を開発した。

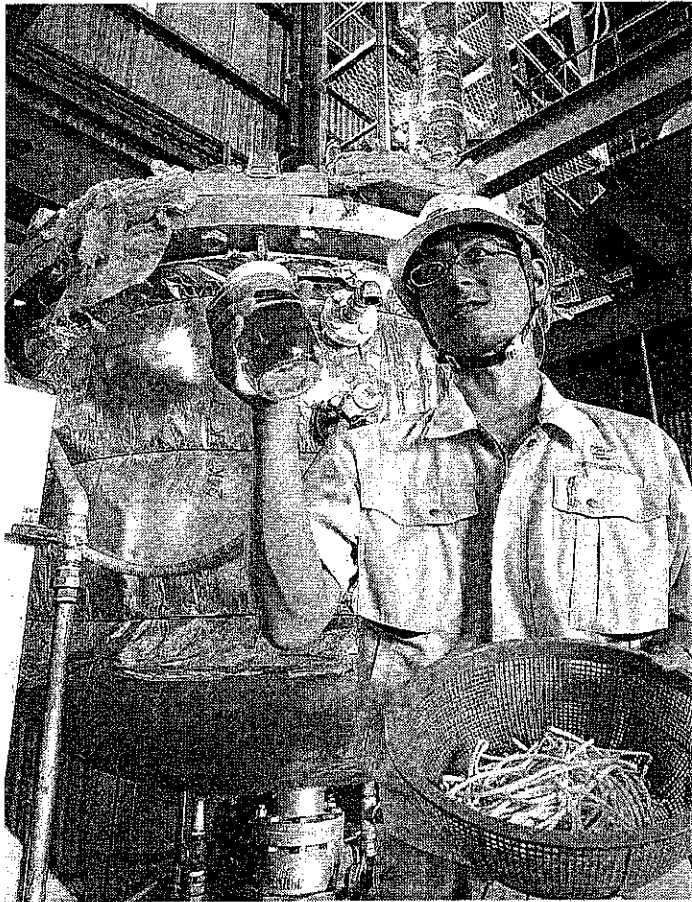
2011年度には運搬機や草刈り機など農業機械の燃料として、ガソリンに混ぜて実験。工場ボイラーでも試用し、燃料として問題がないことを確認した。バイオエタノールの製造技術もほぼ確立、実用化に向けて動き出している。

豊富な森林資源を活用し、林業再生や雇用創出につなげようという「バイオマスタウン構想」を掲げる徳島県那賀町。4月、三重大学がプラント建設の関西化学機械製作（兵庫県尼崎市）と協力し、木材からバイオエタノールなど製造するプラントを設置、実験を始めた。14年度の実用化を

目指す。

中国山地に位置する木材の集散地、岡山県真庭市ではバイオマスツアーがにぎわっている。真庭市は市庁舎の冷暖房にバイオマスボイラーを使うなど、木質バイオマス活用の先進地として知られ、東北地方からのツアー参加者も目立つ。

12年度は100回開催し2000人の参加を見込む。湯原温泉や蒜山高原など多彩な観光地が集積する真庭市。バイオマス先進地としての集客力が既存の観光資源を生かし、山間の町を活気づけている。



香川 うどんからバイオ燃料

うどんの廃棄物からエタノールをつくる装置
(高松市)

24.8.4
日経新聞